慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ルカーチにおける内的危機と過渡期の思想：『歴史と階級意識』の成立過程
Sub Title	Internal crisis and transitional thought in Lukács : formation process of "History and class-consciousness"
Author	安岡, 直(Yasuoka, Sunao)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2014
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.107, No.3 (2014. 10) ,p.463(157)- 491(185)
JaLC DOI	10.14991/001.20141001-0157
Abstract	ハンガリー革命の敗北後, ウィーンに亡命したルカーチは, それまでの観念的革命論と, ハンガリー共産党の指導者クンとの闘争のなかで芽生えていた現実的革命論との矛盾に陥っていった。この矛盾はドイツ中部で生じた武装蜂起「三月行動」を巡る論争のなかで頂点に達し, ルカーチはその理論的分裂から脱することを目指して,『歴史と階級意識』を上梓する。本稿は, これまで十分に明らかにされてこなかったこうした『歴史と階級意識』の成立過程に着目し, 同著を具体的な時代状況との連関において捉えることで, 新たな解釈視座を提示することを目的としている。
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20141001-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルカーチにおける内的危機と過渡期の思想―『歴史と階級意識』の成立過程―
Internal Crisis and Transitional Thought in Lukács: Formation Process of "History and Class-Consciousness"

安岡　直(Sunao Yasuoka)

ハンガリー革命の敗北後、ウィーンに亡命したルカーチは、それまでの観念的革命論と、ハンガリー共産党の指導者クンとの闘争のなかで芽生えていた現実的革命論との矛盾に陥っていった。この矛盾はドイツ中部で生じた武装蜂起「三月行動」を巡る論争のなかで頂点に達し、ルカーチはその理論的分裂から脱することを目指して、『歴史と階級意識』を上梓する。本稿は、これまで十分に明らかにされてこなかったこうした『歴史と階級意識』の成立過程に着目し、同著を具体的な時代状況との連関において捉えることで、新たな解釈視座を提示することを目的としている。

Abstract
After the defeat of the Hungarian Revolution, Lukacs, who had fled to Vienna, fell into a dilemma over the inconsistency between the theory of ideological revolution developed up to that point and the theory of realist revolution; which sprang within his struggle against Hungary's Communist Party leader Kun. This inconsistency culminated during the controversy over the armed uprising "March Action" in Central Germany, with Lukacs publishing his "History and Class Consciousness" aiming at overcoming this theoretical division. This study focuses on the process leading up to the creation of "History and Class Consciousness," a subject not sufficiently examined thus far and provides a new interpretative perspective by approaching the subject against the backdrop of the detailed circumstances of his time.

「三田学会雑誌」107 巻 3 号（2014 年 10 月）

ルカーチにおける内的危機と過渡期の思想

——『歴史と階級意識』の成立過程——

安　岡　　直

（初稿受付 2014 年 5 月 14 日，
査読を経て掲載決定 2014 年 11 月 4 日）

要　　旨

ハンガリー革命の敗北後，ウィーンに亡命したルカーチは，それまでの観念的革命論と，ハンガリー共産党の指導者クンとの闘争のなかで芽生えていた現実的革命論との矛盾に陥っていった。この矛盾はドイツ中部で生じた武装蜂起「三月行動」を巡る論争のなかで頂点に達し，ルカーチはその理論的分裂から脱することを目指して，『歴史と階級意識』を上梓する。本稿は，これまで十分に明らかにされてこなかったこうした『歴史と階級意識』の成立過程に着目し，同著を具体的な時代状況との連関において捉えることで，新たな解釈視座を提示することを目的としている。

キーワード

ルカーチ，クン，「三月行動」，コミンテルン第 3 回大会，攻勢戦術

1.　はじめに

1923 年，ルカーチは「大戦末期以降の私の発展期の総括的決算（GK, 18）[1]」として，8 編の独立した論文からなる『歴史と階級意識』を上梓した。同著は出版直後から大きな反響を呼び起こし，その後も西欧マルクス主義の源泉的テキストとして，とりわけフランクフルト学派に影響を与え今日まで様々な形で研究の対象となっている。

しかしながら，同著に対する思想史的アプローチ，すなわちルカーチが当時どのような状況下で，いかなる困難に直面し何を課題としていたのかを明らかにした研究は必ずしも多いとは言えない。もちろん，初期ルカーチに関する思想史研究は多数に上り，文学・美学をもっぱらとしていたルカーチがマルクス主義者へと変貌していく過程については詳細に研究されている。だがルカーチが『歴史と階級意識』の執筆へと向かったまさに 1922 年の段階で，彼がどのような課題に取り組み，それをどのようにして乗り越えようとしたのかに関しては，十分に論究されてはこなかったのである。換言すれば，従来の研究のほとんどは，1919 年の『戦術と倫理』から 1923 年の『歴史と階級意識』までを一括りにして初期思想と捉え，その間に生じたルカーチの重要な思想的変化についてはこれ

を等閑視してきたのであった。

なるほど『戦術と倫理』から『歴史と階級意識』までを一括りにする解釈も，『歴史と階級意識』の第 1 章が『戦術と倫理』収録の「正統的マルクス主義とは何か」であることを考えれば，必ずしも不自然なものではない。『歴史と階級意識』には 1919 年 3 月に執筆された「正統的マルクス主義とは何か」，1919 年 6 月執筆の「史的唯物論の機能変化」，ハンガリー革命挫折後の亡命先ウィーンで執筆された 1920 年 3 月の「階級意識論」から，1922 年 9 月執筆の「組織問題の方法的考察」までの論文が同時に収められている。収録論文に内容的，思想的に本質的な差異があるとすれば，その方が不自然であろう。(2)

そのため，たとえば『歴史と階級意識』邦訳者の城塚は同著の成立について以下のように語っている。「ハンガリーに成立したホルティ反動政権は，欠席裁判のままルカーチに死刑の判決を下したが，ヴィーンの警察によってシュタインホーフ精神病院に収容されたルカーチは，活発な文筆活動を 1929 年までヴィーンで続けた。そのうち『物象化とプロレタリアートの意識』と『組織問題の方法論』は，このシュタインホーフ精神病院でルカーチが『心ならずも出来た暇を利用して』書いた

---

(1) Georg Lukács, Geschichte und Klassenbewußsein, in: ders., *Werke*, Bd. 2. Luchterhand, Neuwied, Berlin 1968, S. 18. 同著に関しては城塚登，古田光による優れた翻訳書が存在する。『歴史と階級意識』，白水社，1991 年。同著からの引用に際し，訳出は筆者が行ったが，適宜翻訳を参考にさせて頂いた。なお，以下において同著からの引用は GK と略記し，本文中にページ数を記す。同様に *Gelebtes Denken: eine Autobiographie im Dialog*, red., I. Eörsi, Suhrkamp, Frankfurt a. M. 1981 からの引用は（GD），Taktik und Ethik, in: *Taktik und Ethik, politische Aufsätze I, 1918–1920*, Luchterhand, Darmstadt 1975 からの引用は（TE），Warum stürzte die ungarische Proletarierdiktatur nicht? in: *Revolution und Gegenrevolution: Politische AufsätzeII.1920–1921*, hrsg. von J. Kammler und F. Benseler, Luchterhand, Darmstadt und Neuwied 1976 からの引用は（WP），*Weltreaktion und Weltrevolution. Flugschriften der Jugend-Internationale*, Nr.11, Verlag der Jugend-Internationale, Berlin 1920 からの引用は（WW），*Die Theorie des Romans*, Cassirer, Berlin 1920 からの引用は（DR），Noch einmal Illusionpolitik, in: ders., *Werke*, Bd. 2 からの引用は（NI），Alte Kultur und neue Kultur, in: *Kommunismus*, I. Jg., Heft 43. 7. November 1920, Jungarbeiter-Verlag, Wien からの引用は（AN），Spontaneität der Massen, Aktivität der Partei, in: ders., *Werke*, Bd. 2 からの引用は（SA），Mein Weg zur Marx, in: *Marxismus und Stalinismus: Politische Aufsätze Ausgewähltes Schriften* IV, hrsg. von U. Schwerin, E. Hora, R. M. Gschwend, Rowohlt, Hamburg 1970 からの引用は（MM），Organisatorische Fragen der revolutionären Initiative, in: ders., *Werke*, Bd. 2 からの引用は（OF），Vor dem dritten Kongreß, in: *Georg Lukács Organisation und Illusion: Politische Aufsätze* III 1921–1924, hrsg. von J. Kammler und F. Benseler, H. Luchterhand, Darmstadt 1977 からの引用は（VK），Diskussionsbeitrag in der Sitzung am 2. Juli 1921, in: *Georg Lukács Organisation und Illusion*, H. Luchterhand, Darmstadt 1977 からの引用は（DS），Blum-Thesen, in: ders., *Werke*, Bd. 2 からの引用は（BT），Probleme des Realismus I, in: ders., *Werke*, Bd. 4 からの引用は（PR）とする。

(2) しかしながら，ルカーチは『歴史と階級意識』収録に際して初期論文の根本的な書き換えを行っており，タイトルは同じであってもそれらが初出時と同じものであるとは言い難い。

ものであり，まさにハンガリー革命の思想的総括というべきものである」。我が国のルカーチ研究者の多くは，上記のような城塚の了解を踏襲しているが，ここには重大な誤解がある。

もし城塚の言う通り「物化とプロレタリアートの意識」と「組織問題の方法的考察」[(3)]がシュタインホーフ精神病院収容時に書かれたとすると，その時期は1919年である。しかし，上記二つの論文が書かれたのは1922年のことであり，これはありえない。したがって「心ならずも出来た暇」が指しているものも，城塚が想定しているものとはまったく異なる。以下において示されるように，ルカーチが上記二つの論文を執筆した余暇とは，彼がハンガリー共産党内の権力闘争に敗れ党務の第一線から退いていた時期にほかならない。革命における党の役割を論じた「組織問題の方法的考察」は，ルカーチが直面していた党内闘争の諸問題が大きく影響しており，このことを抜きにして同論を論じることは出来ないのである。また「物化とプロレタリアートの意識」には，当時ルカーチがコミンテルン第3回大会をきっかけとして対峙しなければならなかった現実と理念との緊張が色濃く反映されている。

総じて言えば，1918年に始まるマルクス主義者ルカーチとしての思想的歩みにおいて，『歴史と階級意識』とそれ以前の思想とは明確に区別されるものである。そこには，確かに飛躍と呼ぶべきものがあった。さしあたり，われわれはそれらを観念的革命論と現実的革命論と呼んでおきたい。前者は，ハンガリー革命のなかで生まれたルカーチにおける古い革命論であり，後者はウィーン亡命期のなかで育っていった新しい革命論である。革命政権瓦解後，ルカーチは党の指導を巡ってハンガリー革命政権のリーダーであったベーラ・クンとの対立を深め，徐々にそれまでの革命論の問題性に気がついていった。したがって1919年のウィーン亡命から1923年の『歴史と階級意識』へ至る道程は，ルカーチがハンガリー革命のなかで形成した革命論の問題性と向き合い，より現実的な社会変革の理論を形成する自覚的な営為だったと言える。マルクス主義に画期をもたらしたと言われる『歴史と階級意識』は，古い自己から脱却していこうとするルカーチの「内的な危機的過渡期（GK, 18）」がもたらした思想的成果だったのである。

本稿が着目しようとするのは，ルカーチが『歴史と階級意識』へ向かっていくまでのこの思想的道程にほかならない。代表的な先行研究としては，アントニア・グルンネンベルクの『市民と革命』とミシェル・レーヴィの『ゲオルク・ルカーチ』が挙げられる。グルンネンベルクの研究は，初期ルカーチに関する卓越した思想史研究であり，ルカーチの思想が抱える観念性を実証的に捉えている。しかし，「観念論者ルカーチ」という視点から，『歴史と階級意識』を『戦術と倫理』との連続性のうちに捉えているために，『歴史と階級意識』においてルカーチが目指した現実主義の志向をほと

---

(3)　本稿では2つの論文をより原意に忠実に「物化とプロレタリアートの意識」および「組織問題の方法的考察」と訳す。なお，ルカーチの［Verdinglichung］という用語に対する「物象化」という訳語は，「物件化［Versachlichung］」との区別や，事物化・即物化を表現しようとするルカーチの意図からして必ずしも適切な訳語とは思われない。本稿では端的に「物化」という訳語を一貫して用いる。

んど摑んでいない[4]。これに対して，今ひとつの優れた思想史的解明を行ったレーヴィの研究は，同著を「1919 年から 20 年にかけてのユートピア的傾向を破棄・超越する新たな理論的世界」を提示するものとして評価し，「1919 年から 21 年にかけての著作を凝縮したもの，あるいはその続き」とする解釈を「幻想」だと断じている[5]。だが，『歴史と階級意識』における思想的転回を，「レーニンの現実主義」という外的ファクターに影響されたものと捉えているため[6]，ルカーチ自身の緊張を孕んだ発展の筋道が見えていない。ルカーチが『歴史と階級意識』において自己の革命論を再構築した際，レーニンの『共産主義内における「左翼主義」小児病』をひとつの手引きにしていたのは確かである。しかし，ルカーチを観念的革命論からの脱却へと向かわせたのは，真っ向から対立する新旧二つの思想の「同時存在が，頂点に達した（GK, 17）」からであった。

こうした『歴史と階級意識』成立史に関する研究の不備は，同著に対する解釈を一面的にせずにはおかなかった。その端的な例が，同著第 4 章「物化とプロレタリアートの意識」を『歴史と階級意識』全体と等置するような読解である。もちろん，第 4 章は分量的にも同著のほとんど 3 分の 1 弱を占め，内容的にも物化論を含む重要な章である。しかし，『歴史と階級意識』にはこれに加えて特殊な位置づけを持つもうひとつの論文が存在していた。それが「組織問題の方法的考察」である。『歴史と階級意識』は，1919 年以降に書かれた 8 編の独立した論文によって構成されているが，『歴史と階級意識』のために書き下ろされたのは，この二つの論文だけである。そして，この両論文こそ，「内的な危機的過渡期」のなかで生み出されたそれまでの思想の総括を表すものであり，ルカーチが『歴史と階級意識』における「決定的に重要な研究（GK, 18）」と呼んでいるものなのである。

ところが，一見すると一方が物化問題を扱った哲学的・社会学的論考，他方が共産党の組織問題を扱った政治的・実践的論考と見えるために，もっぱらルカーチのテキストだけを頼りとする読解では両論文が同じ時期に同じ問題意識の下で書かれた論文であることが分からない。そのため，これまでの研究は同著の立体的な理解へ至らず，その評価も分散的なものにならざるをえなかった。本稿は従来の研究の弊を改め，『歴史と階級意識』を時代状況との具体的な関係において捉えることでその成立史に光を当て，同著の新たな解釈視座を提示することを目的としている。

2. ウィーンへの亡命

1919 年 7 月末，ルーマニア軍がティサ河を渡り，ブダペシュトへの進攻が時間の問題となるなか，

---

(4) Vgl. Antonia Grunenberg, *Bürger und Revolutionär, Georg Lukács 1918–1928*, Europäische Verlagsanstalt, Köln 1976, S. 185.

(5) Michael Löwy, *Georg Lukács: From Romanticism to Bolshevism*, NLB, London 1979, p. 173.

(6) Löwy, The Twin Crises, Interview with Geog Lukács, in: *New Left Review*, No. 60, March-April, London 1970, p. 42.

ハンガリー革命政権の指導者クンの徹底抗戦の呼びかけも空しく，革命統治評議会は，ペイドルを首班とする労働組合指導者からなる新政府への政権移譲を決定した。評議会の主要メンバーたちはルーマニア軍の首都占拠の前に，オーストリアへと亡命する。

しかし，ルカーチはこの亡命団に加わっていない。彼はハンガリーに留まり，地下活動をするよう党から命じられていたのである。敗戦後，大きな反動が起こるであろうことは十分予測されていた以上，この指令は極めて過酷なものだったと言える。なんと言ってもルカーチは革命政権の閣僚のひとりだったのだから。実際，ルーマニア軍進駐後，ペイドル政権はたちまち瓦解し，その後成立したホルティ体制下では逮捕，拷問，虐殺が広く行われ，正確な数字は分からないものの，およそ 1000 人から 5000 人の犠牲者，数十万人の逮捕者を出している[(7)]。こうした状況のなかで，一度は殉教を覚悟してハンガリー残留を決めたルカーチも，地下活動の継続を諦め 8 月末ないしは 9 月初旬にはウィーンへと亡命した。

ウィーン亡命後まもなく，ハンガリーでは革命政権の要人たちに対する裁判が行われ，ルカーチもまた欠席裁判の下死刑判決を下される。新政府は判決を執行すべくオーストリア政府に亡命者たちの引き渡しを要求し，ウィーン警察当局に提出された引き渡し要請者リストに名を連ねたルカーチは，10 月に逮捕された。だが，当時オーストリアでは社会民主党が政権を担っていたこともあり，結局ルカーチは 2 ヶ月前後の拘留を経て 1919 年末には釈放されている。もっとも，その生活は完全に自由なものではなかった。オーストリアの政治的利益を損なういかなる種類の政治活動も行わないことを条件に，不安定な身分のままウィーンでの生活を送ることになったのである。ルカーチには常に官憲の監視がつき[(8)]，そのため当時彼は「私に対してなんの証拠も突きつけることが出来ないよう（GD, 114）」慎重に政治活動を行っていたという。ハンガリー共産党は，オーストリアにおいて公式には存在せず，ルカーチたちは名目上オーストリア共産党に籍を置いていた。

しかしながら，ウィーン亡命時代のルカーチからは打ち沈んだ様子はほとんど伝わってこない。亡命と逮捕のショックからルカーチはいち早く立ち直り，1920 年から活発な活動を再開している。客観的に見れば，期待と感激をもって樹立されたプロレタリア独裁政権が，頼みとする労働者大衆にさえ反旗を翻されわずか 133 日で瓦解し，かつ彼自身が帰国することもままならない亡命者の身であることを考えると，これは奇妙なことにも見える。だが，ハンガリーでの挫折を世界革命という最終的勝利の前の一時後退と考えていたルカーチら亡命共産主義者たちは，「陽気な黙示録[(9)]」に支えられていたのだった。「ハンガリー・プロレタリア独裁はなぜ崩壊しなかったのか」という逆説的

---

(7) Miklós Molnár, *From Béla Kun to János Kádár, Seventy Years of Hungarian Communism*, trans. by A. J. Pomerans, St. Martin's Press, New York, Oxford, Munich 1990, p. 31.

(8) Vgl. Yvon Bourdet, Lukács im Wiener Exil (1919–1930), in: *Geschichte und Gesellschaft. Festschrift für Karl R. Standler zum 60 Geburtstag*, Europa Verlag, Wien 1974, S. 301.

(9) Arpad Kadarkay, *Georg Lukács: Llife, Thought, and Politics*, B. Blackwell, Cambridge 1991, p. 235.

タイトルで発表された論文において，ルカーチはこう宣言している。「ハンガリーのプロレタリアートは，今日，最初の独裁の時代よりももっと真実の解放の近くにいる（WP, 37）」と。ハンガリー革命の挫折は，当初ルカーチの革命思想になんら本質的変化をもたらすことはなかった。

3. 革命政権瓦解の総括

逮捕からの釈放後，ルカーチたちが最初に取り組まなければならなかったのは，当然ながら革命に対する総括であった。だが，亡命直後のルカーチは，革命が抱えていた本質的問題に光を当てる視座をまだ持っていない。ルカーチの総括は教条的なものであり，革命政権が純粋に革命的ではなかったこと，すなわちそこに社会民主主義的要素が混入していたことが問題だとされている。こうした理解は，コミンテルン第 2 回大会で報告されたハンガリー共産党の公式見解に沿うものであった。報告者のマーティヤーシ・ラーコシは，こう主張している。革命政権の支配政党であるハンガリー社会党は，共産党と社会民主党との組織的統合によって成立したものであったために，「水増しされた共産党」としての性格を持たざるをえず，ロシアにおいてボルシェヴィキが発揮したような指導性を持ちえなかった。「そのように水増しされた共産党では，社会民主主義者との戦いは極めて不徹底なものとなっただろうし，協商国軍の前から独裁を救い出すことが出来なかったのも当然である」[(10)]。

ラーコシの報告は，全体としてはハンガリー革命の成立から崩壊までを客観的に述べたものだったが，革命政権の崩壊は直接的にはハンガリーの軍事的劣位に起因するのであって，たとえ鉄の結束を誇る共産党があったとしてもプロレタリア独裁を協商国軍の前から救い出すことは叶わなかったであろう。また，外的脅威がなかった場合でさえ，革命政権を維持するのは困難であった。一時的にせよ民衆が革命政権を支持したのは，祖国防衛を約した革命政権に敗戦によって失われた領土の再獲得を期待していたことが大きく，革命の理念よりもマジャール・ナショナリズムにその根拠があったと言える。羽場の言うように，「ハンガリー国民の多くにとっては，1919 年革命における社会主義の選択は，自国領土と自民族の延命のための一つの手段でしかなかった」[(11)]。

とはいえ，ボルシェヴィキのように暴力によって国民を押さえつけることの出来る「水増しされない」共産党があれば，事態が変わっていた可能性は確かにある。むろんルカーチも，革命における暴力の行使を否定するものではなかった。ルカーチによれば，革命はそれに背を向けることが罪でありながら「罪を犯さずに行動するのは不可能（TE, 52）」な避けがたいディレンマの前に人を立たせる。ルカーチの考えでは，殺人はあくまで罪であり革命の大義をもってしても正当化はされな

（10） *Berichte zum Zweiten Kongreß der Kommunist Internationale*, Kommunistischen Internationale, Hambug 1921, S. 41.

（11） 羽場久浗子『ハンガリー革命史研究』，勁草書房，1989 年，494 ページ。

い。ルカーチは述べている。「殺人はいかなる場合にせよ是認されえないことを，揺るぎなくなんの疑いもさしはさまずに知っている人間の殺人行為だけが，悲劇的にも道徳的な性質のものたりうる（TE, 53）」と。世界革命のための罪を引き受けること，ルカーチによればそれこそが革命家の倫理であった。[12]

しかし，ルカーチたちが理想と看做すソヴィエト・ロシアのプロレタリア独裁において，暴力の行使はけっしてこうした倫理的緊張を孕むものではなかった。「独裁は直接暴力に立脚したどんな法律にも拘束されない権力」[13]であるとするレーニンは，暴力行使を旧支配者から権力手段を奪い取るための最小限のものでは終わらせず，「搾取された，あるいはほんの少ししか発達していない中規模農民，手工業者等々の一部が，搾取者に服従し，服従しがち」[14]であるとして，その範囲を社会全体に恣意的に押し広げていったのである。レーニンは体制に黙従しないあらゆる人々を「人民の敵」と断じ，暴力の対象とするのをためらわなかった。

これとは対照的に，ルカーチの経験したハンガリーでのプロレタリア独裁は，社会民主党との合同によって成立したものであったために，暴力が無制限に行使されることはなかった。ルカーチのプロレタリア独裁に対するナイーブさの一因は，ここにある。また，ソヴィエト・ロシアの実態についても当時はまだ明らかにされておらず，ルカーチはそれを知ることが出来なかった。ボルシェヴィキ独裁に対する批判は十月クーデタ（十月革命）当初から，ローザ・ルクセンブルク，カウツキー，ベルンシュタインなど多くの人々によって展開されていたが，批判の多くは「民主主義対プロレタリア独裁」という理論的レベルでなされている。アクセルロード，マルトフなどロシア内部からの批判も，ボルシェヴィキ独裁の暴力性を具体的に糾弾するものではなかった。

ルカーチがソヴィエト・ロシアにおいて，とりわけ食糧徴発の名の下に農民に対して振るわれた未曾有の残虐行為の数々を知っていれば，[15]彼とて強大な独裁政党の必要性をためらいなく訴えることは出来なかったであろう。しかし，ソヴィエト・ロシアの真実を知らないルカーチは，独裁と暴力の連関を深刻に受けとめることはなかった。コルニーロフの反乱とクロンシュタットの反乱を同列に置き，独裁においてもプロレタリアートによる「自己批判の可能性は制度的に確保されねばならない（GK, 469）」と，あたかもそれが可能であるかのごとく主張していること自体，ルカーチが実情からかけ離れていたことを示すものである。レーニンを絶対視するルカーチにとって，ソヴィ

（12） Vgl. József Lengyel, *Visegrader Strasse*, Dietz Verlag, Berlin 1959, S. 244.

（13） W. I. Lenin, Die Proletarische Revolution und der Renegat Kautsky, in: *ders., Werke*, Bd. 28, Dietz Verlag, Berlin 1959, S. 234.

（14） Lenin, Die Proletarische Revolution und der Renegat Kautsky, in: *ders., Werke*, Bd. 28, Dietz Verlag, Berlin 1959, S. 252.

（15） Cf. Orlando Figes, *A People's Tragedy: the Russian Revolution, 1891–1924*, Penguin Books, New York 1998, pp. 589–649；梶川伸一『幻想の革命』，京都大学学術出版会，2004 年，参照。

エト・ロシアのプロレタリア独裁はあくまで理想であった。彼にとって重要だったのは，むしろこの理想に向けて労働者大衆を導くことだったのである。

ルカーチは，この理想の実現を阻んでいるのは，ブルジョワジーの権力ではなくむしろ労働者大衆自身の意識の低さであると見ていた。ルカーチによれば，第一次世界大戦後，ハンガリーでのそれを含め，中欧諸国で生じた革命的蜂起が結局失敗に終わったのは「権力へ向けてのプロレタリアートの意識とその成熟（WP, 33）」が欠けていたからだという。ルカーチは主張する。「中部ヨーロッパのプロレタリアートの理念世界は，小ブルジョワ的な民主主義の教説に染まっていた」ために，「労働者階級は自分の懐にころがりこんできた権力を利用せず，また利用することも出来なかった（WP, 33）」のだと。

だからこそ，ルカーチによると労働者大衆の真の敵は，改良によって資本主義的現実と妥協させ彼らからその革命的階級意識を奪い取る社会民主主義者なのである。ルカーチは言う。「ハンガリー・プロレタリアを殺害しているのは，直接的にはホルティとヘーイヤシであるにもかかわらず，やはりその真の殺害者はミアキツからクンフィに至るまで同様かつ例外なしに社会民主主義者たちである。ペイエル＝ベームが，コルヴィンと彼の殉難者仲間を殺害したわけではないように，ノスケも自らリープクネヒトやルクセンブルクを殺害したわけではない。知識人の張本人たちこそが，労働者たちの手から武器を奪い，彼らを説得して戦う思想を放棄させ，反革命の悪党どもに武器を与えるという真の罪を犯したのだ（WP, 35）」。

それゆえ，労働者大衆の意識が「資本主義の最後の砦である社会民主主義（WP, 36）」によって現状肯定へと誘導される前に，彼らを社会民主主義から引き剝がす革命の前衛集団たる党が必要となる。「欠如しているもの，それは革命的組織であり，革命的スローガンであり，革命的指導部つまりは共産党なのである（WW, 16）」。純粋な革命政党としてハンガリー共産党を再生させること，当然ながらこれこそが亡命後ルカーチが着手しなければならないと考えた第一の課題であった。

4. クンとの闘争

しかしながら，鉄の結束を誇る共産党の形成を喫緊の課題とする点で亡命ハンガリー共産党員たちは一致していたにもかかわらず，再建された党は早くも 1919 年末にはクン派とランドラー派に分裂し，激しい党内闘争の様相を見せ始めていた。

第一次世界大戦時，ロシアで戦争捕虜となり，ロシア革命に感化されて共産党員となった生粋のレーニン崇拝者クンに対して，イェーネ・ランドラーは社会民主党左派に属し，組合指導者としての経歴を持つ現実主義の政治家である。革命政権ではルカーチとともに閣僚のひとりであったが，ルカーチの述懐によると，彼との交流が深まるのはウィーン亡命時代からだった。クンに対して批判的であったルカーチに対して，ランドラーの方から彼に接近してきたのだという。だが，ルカーチ

は派閥力学からランドラーと同盟したわけではない。ランドラーの人となりを尊敬し，彼から政治的現実主義の重要性を学んだことを幸運だったと述べている（Vgl. GD, 35）。実際，ランドラーのこの影響が観念的革命論者ルカーチにひとつの転機をもたらすことになる。

ランドラー派とクン派を隔てていたのは，革命政権瓦解後のハンガリーにおける闘争方針の違いであった。「建党派」を自称していたクン派が，非合法となり公式には消滅していたハンガリー共産党を独立した政党として復活させようとしていたのに対して，ランドラー派は労働組合・社会民主党のなかに共産主義勢力を浸透させていくことを目指していたのである。クンによれば，ランドラー派は「解党主義者」であった。

これに対してランドラー派は，必ずしも純粋なボルシェヴィストによる党の形成に拘泥していなかった。ランドラー派の方針が明確な形をとるにはクンとの闘争から数年を必要としたが，その最終的な形態はプロレタリア独裁に先んじてブルジョワ民主主義の確立を目標とし，ハンガリー社会主義労働者党の設立を目指していくというものであった。驚くべきことに，ホルティ体制下での白色テロルにもかかわらず，ハンガリーではなお労働組合は無視することが出来ないだけの力を保ち，その主たる支持政党である社会民主党は1922年の選挙でブダペシュトにおける有効投票数の40％，全体でも15％以上を獲得し，24の議席確保に成功している[16]。ランドラー派がハンガリーでの闘争の拠点と考えたのが，この労働組合・社会民主党勢力だったのである。

しかし，クンはこうしたハンガリーの現実よりも，1920年のコミンテルン第2回大会で決議された「共産主義インターナショナルへの加入条件に関する原則」のなかで，「コミンテルンに加盟しようとするすべての組織は，労働運動の多かれ少なかれ責任ある部署（党組織，編集部，労働組合，議会内党派，協同組合，地方行政）から，徹底的かつ計画的に，改良主義者，中央派を排除し，彼らを真の共産主義者によって置き換えなければならない[17]」という原則論にこだわっていた。しかも，決議前文にはこう記されていたのである。「いかなる共産主義者も，ハンガリー・レーテ共和国の教訓を忘れてはならない。ハンガリーの共産主義者たちのいわゆる左派社会民主主義者との統合の代償は，ハンガリー・プロレタリアートにとって極めて高いものになった[18]」。

ルカーチによれば，クン派に対するランドラー派への不満が爆発したのは，クンがこの原則論を実行に移すべくハンガリーに残留する共産主義者たちに，労働組合費支払い拒否命令を出そうとしたことに端を発するという[19]。ハンガリーでは労働組合費には社会民主党の党費が含まれており，組合員は自動的に社会民主党の党費も支払っていた。クンは組合費支払いを拒否させることで，彼ら

（16） Cf. Ervin Pamlényi (ed.), *A History of Hungary*, trans..by L. Boros, Collet's, London 1975, p. 470.

（17） *Leitsätze und Statuten der Kommunistischen Internationale, Beschlossen von II. Weltkongreß der Kommunistischen Internationale Moskau, vom 17. Juli bis 7. August 1920*, Kommunistichen Internationale, Hamburg 1920, S. 26.

（18） *Ebenda*, S. 25.

を社会民主党から引き離そうとしたのである。一見すると些細な問題に見えるが，ルカーチらが危惧したのは，支払いを拒否することで組合員が共産主義者であると表明することの危険性であった。当時，ハンガリーでは共産党は非合法であり，共産主義者であることが判れば弾圧の対象となるのは避けがたかったのである。ルカーチによれば，党の分裂は小さな原因から始まったが，そこには理念を優先させるべきか現実を優先させるべきかを巡る「理論的重要性（GD, 263）」が存在していた。

したがって，ルカーチがランドラー派の一員となってクン批判に加わったことは，彼が教条主義的な反社会民主主義の立場から大きく転換し，現実と理論を統合する方向へ向かい始めたように見える。しかしながら，実態としてはルカーチのなかにそれまでの立場とは相いれない新たな要素が混入し始めたという方が正確であり，これによって彼がただちに理念優先の観念的革命論から脱却したことを意味していたのではない。この時期，彼のなかには現実性と観念性が和解し難く併存していたのである。具体的に言えば，ルカーチは理論的には社会民主主義的・改良主義的立場を断じて認めることが出来ないという革命的メシアニズムの立場を採りつつ，ハンガリーでの闘争では現実的・漸次的路線を採っていたのだった。ルカーチは「政治的・哲学的見解」に，「実質的にも内面的にも対立する二元性（GK, 16）」を抱え込むことになったのである。

そのためクンとの闘争は，いきおい自己矛盾を孕んだものにならざるをえなかった。ルカーチはランドラーの現実主義に引き寄せられる形で反クン派の旗幟を鮮明にしていったのであるが，ルカーチの批判するクンとはいわば鏡に映った自分自身でもあったからである。この点で，レーニンが『共産主義インターナショナル』誌に掲載した小論において，ルカーチとクンを並べて小児病的左派急進主義者として批判しているのは象徴的である。レーニンは言う。「G.L.［ゲオルク・ルカーチ］」には「厳密に規定された歴史的諸状況の現実的な分析」が欠けており，「B.K.［ベーラ・クン］」は「現実的状況の現実的追求」[20]を避けていると。

実際，もとをただせばルカーチはランドラーよりもむしろクンに近いところに位置していた。ルカーチが共産主義者となったのは，ロシアから帰還したクンたちに革命的メシアニズムを吹き込まれたことがきっかけである。それまで政治とは無縁に過ごしてきたルカーチは，政治家・活動家としての経験を一切持たぬまま，クンたちが唱えるロシア革命の理想に鼓舞されて共産主義者となったのだった。

ルカーチには，社会が個人にとって疎遠なものとなり，融和の道を失った「罪業の完成された時代（DR, 157）」としての近代において，共産主義こそが個人の宿命に救済をもたらすものと思えた。

（19） Cf. Bennett Kovrig, *Communism in Hungary. From Kun to Kádár*, Hoover Institution Press Stanford, California 1979, p. 85.

（20） Lenin, „Kommunismus“ Zeitschrift der Kommunistischen Internationale für die Länder Südosteuropas, in: *ders., Werke*, Bd. 25, Wien, Berlin 1930, S. 358f. 括弧内筆者。

ドイツ哲学に通じていたルカーチは，解放思想としてのヘーゲルの歴史哲学にマルクス主義を接続し，哲学的装いを施された，その意味でクンより洗練された革命観を形成していく。だが，まさに哲学的にマルクス主義へと接近したがゆえに，ルカーチは，共産主義化のプログラムをレーニンを憂慮させるほど足早に推し進めたクンと，具体的なハンガリーの現実から乖離して革命を構想していたという点では同じだったのである。ルカーチとクンはともに，現実ではなく理念に準拠して革命を考えていた。

なるほどルカーチは，ウィーン亡命後，ホルティ体制下という過酷な条件の下で「ハンガリーの運動を再生させるための実践的可能性からけっして目を離さなかった（GD, 122）」ランドラーを支持し，机上で構想した革命的命令をモスクワから発するクンを「冒険主義者」として批判するようになる。[21] ルカーチからすれば「ハンガリー共産党は共産主義インターナショナルの指導の下，近い将来ハンガリーにおける強力な大衆政党となるであろう」というクンの主張は，「想定としてはファンタジックな幻想，目標設定としては良心なき冒険政策」以外のなにものとも思えなかった（NI, 156）。だが，その当のルカーチが，世界革命のうねりが「フィンランド，ハンガリー，ミュンヘンでの敗北によってもけっして退潮してはいない（GK, 15）」という信念に基づいて，攻勢戦術と呼ばれる急進的な政治的・理論的方針を熱烈に拡充しようとする世界革命論者でもあったのだ。

世界中から革命家が流れ込んでいたウィーンは，ルカーチにとって「自己の革命的メシアニズムの全知的情熱を存分に発揮（GK, 16）」出来る恰好の舞台だったという。しかしその一方で，「徐々に組織化されてきたハンガリーでの共産主義運動」は，「メシア的な視点にだけ思考を向けているわけにはいかない」ことをルカーチに認識させ，彼に「観念的・ユートピア的な革命的メシアニズムと極めてしばしば対立する精神的態度（GK, 16f）」を取らせるようになったのだった。

そして，1921 年 3 月，ドイツ中部で生じ大敗北を喫した急進的武装蜂起「三月行動」を巡る論争を通じて，ルカーチはついにこうした自己矛盾の併存を許容出来なくなっていく。この論争は，コミンテルン第 3 回大会において「三月行動」の否定という形で決着がつけられるのだが，ルカーチは断固として「三月行動」支持の立場を貫いた。しかし，ルカーチが大勢に抗ってまで支持した「三月行動」を陰で指導していたのは，皮肉なことにクンだったのである。ドイツは，まさにクンの冒険主義の実験場にされたのだった。[22] ルカーチにとって，自らの理論が持つ観念性から脱却する時が来ていた。

---

(21) Cf. Kovrig, *Communism in Hungary*, p. 83.

(22) Cf. Lazitch and Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, Hoover Institution Press, Stanford, Calif. 1972, p. 484.

5. 党と官僚主義

だがルカーチには，現実的志向と並んで，クンとの闘争の結果芽生えてきた反官僚主義というもうひとつの志向があった。ルカーチによれば，コミンテルンのバックアップを得て，クンが金や地位を餌に形成したハンガリー共産党は，あたかも上役と下役のいる官庁，魂のない官僚組織に堕していたという。クンの眼差しが向けられているのはハンガリーではなくモスクワであり，コミンテルン幹部の覚えをめでたくするためにハンガリーの現実を顧みないありとあらゆる幻想政策が採られている，これがルカーチの批判であった（Vgl. NI, 155–160）。

ルカーチのこうした批判は，たんにクンの倫理性や観念性だけを問題にしたものではない。ルカーチは「上から，つまり直接モスクワからひとつの運動を作ろうとしたクン路線（GD, 129）」が「官僚主義的セクト主義（GD, 124）」になっているとして，事実上意思決定の流れそのものを批判の俎上に載せていたのである。ドゥチンスカの証言によれば，ルカーチを理論的支柱とするランドラー派は，反クン派の最初の集会においてまさに党組織の硬直化を問題にしていた。「ルカーチ・グループ」[23]は，党の誤りを「軍事組織的規律を持つ集中制」に見出し，「反対派グループには，民主的構成，党員に対する責任ある指導，モスクワから独立した党員の献身に依拠する実質的存在を与える」[24]という決議を採択して，大きな支持を集めたという。

しかしながら，まさにハンガリー革命の経験を通じて，労働者大衆には革命に関する正しい洞察，階級意識が欠けていると痛感していたルカーチにとって，党内の民主化，反官僚主義を徹底させることは難しかった。ルカーチがこの時期，レーニンの『何をなすべきか』を読んでいたのかどうかは判然としないが[25]，その了解は基本的にレーニンと同じである。レーニンによれば，自然発生的に生じる労働運動は「労働者と雇用者との敵対関係の目覚めを印す」ものではあっても，そこには「自分たちの利益が現在の政治的・社会的体制全体と和解し難く対立しているという認識」は存在しない。労働者は革命的な社会民主主義的意識を持ってはおらず，「この意識は外部からしかもたらすことが出来ない」[26]というのである。彼らが自力で獲得できるのは組合主義的意識までであり，その場合，運動は最終的に体制へと取り込まれてしまう。レーニンが前衛党の不可欠性を訴えたのは，まさにそのためであった。

---

(23) ドゥチンスカによれば，ルカーチの思想的影響力は絶大であり，そのため彼女はランドラー派をルカーチ・グループと呼んでいた。Vgl. Ilona Duczynska, Zum Zerfall der K.P.U., in: *Unser Weg*, Jg. 4, Heft 5. 1. März 1922, Berlin, S. 102f.

(24) *Ebenda*, S. 103.

(25) 『歴史と階級意識』までの著作において，ルカーチが『何をなすべきか』からの引用，参照をした箇所はない。

(26) Lenin, Was tun?, in: *ders., Werke*, Bd. 5, Dietz Verlag, Berlin 1958, S. 385.

ルカーチもまた,「自然発生的な労働運動」はあっても「自然発生的な革命」はありえないと考えていた。ウィーン亡命後，ルカーチははじめて革命を経済的観点から捉える論文「古い文化と新しい文化」を発表している。同論文で捉えられた社会主義の理念は，これまでになく具体的である。だが，社会主義に関する思想を深化させるとともに，ルカーチは社会主義の理念が労働者大衆にとって一層容易には理解されないだろうことを認めるようになる。ルカーチはもはや，労働者大衆が「正しく吟味」すれば社会主義に同意するであろうといった楽天的見方をしていない。

ルカーチによれば，資本主義は経済的のみならず，社会的・文化的な領域での巨大なパラダイム転換の産物である。資本主義をその前史から分かつのは,「経済生活が社会的な生活機能の一手段」であることをやめて「社会的な生活機能の中心」となり,「社会生活」全体が「ひとつの大きな交換関係」へと変容を遂げた点にあった（AN, 1540)。このことは社会のあらゆる所産や対象が商品という形態を取るようになったことを意味するだけではない。資本主義的社会環境において，人間もまた労働力商品という形で商品関係に組み込まれていくのであるから，人々は他者は言うに及ばず自己までをも商品社会で生きていくための手段と看做すようになる。ルカーチは言う。解放的意味を帯びていた「自己目的としての人間」という近代の理念を「資本主義的社会秩序以上に踏みにじったものはない（Vgl. AN, 1544)」。

ルカーチの考えでは，経済的動因によって形作られたこの内的・外的生活を，人間的動因によって作り直すことこそが社会主義の本質であった。それゆえ資本主義から社会主義への転換はたんなる制度的組み換えではなく，資本主義のなかで培われた人間の思考や感性の変革を要求する，まさに巨大なパラダイム転換なのである。だからこそ,「プロレタリア国家の課題」は「生産と分配との組織」に尽きてはならないのだという。共産主義が生産性や富の分配の公平性において，仮に資本主義を上回っていたとしても，そのことだけが共産主義を資本主義から隔てているのであれば，経済生活が「依然として人間的原理を支配し続ける（AN, 1548)」ことに変わりはない。ルカーチによれば，社会主義が目指しているのは，資本主義的な人間のアトム化を揚棄して人々が「相互に支え補完し合い，その共通の目標すなわち人間的なさらなる高い発展の理念に奉仕（AN, 1548)」する社会を形成することにある。

だが，ルカーチの見るところ，人々はおそらくは共産党が権力を奪取した後でさえ資本主義が生み出した思考，価値観に支配され続け，社会主義の理念を理解することが出来ない。その意味で，ルカーチにとって社会主義の真理は「ごく少数の人々にしか意識されない（AN, 1545)」一種の特権的な知と看做されていたのである。ルカーチは，革命の趨勢をローザ・ルクセンブルクが主張するように「労働者階級の大衆的自我」[27]に委ねてしまうわけにはいかず,「メシア主義的セクト（GK, 15)」

(27) Rosa Luxemburg, Organisationfragen der russischen Sozialdemokratie, in: dies., *Werke*, Bd. 1, 1/2, Dietz Verlag, Berlin 1970, S. 444.

によって導こうとしたのであった。

しかし，そうだとするとルカーチの構想においても革命における意思決定は「上から下へ」と一方的に流れていくことになり，少数支配の構造に変わりはない。したがってルカーチのクン批判は，またしても自己矛盾を孕むものにならざるをえなかった。なるほどルカーチは，クンの党組織を盲目的で奴隷じみた服従に基づいてしかその権威を貫徹できない官僚組織であると非難し，これに対して共産主義的な同志的信頼によって結ばれた「全体としての党」組織を対置しようとする（Vgl. NI, 158f）。だが，この一体性を支えるものが何かと言えば，ハンガリーの実情に即した，その意味でクンより妥当性の高い指導の正しさでしかなかった。

ルカーチは，指導部と党員あるいは労働者大衆の関係を記述する際に，命令する者と服従する者という言葉を避け，中央機関は命令する権限を持つのではなく「教育する（NI, 160）」義務を負っているのだという。とはいえ，命令する権力者が教育する父権的指導者に代わったとしても，社会主義の真理を保持する指導部と無知な党員あるいは労働者大衆の間には双方向的な意志の流れは存在せず，こうした民主主義的媒介が存在しないところには，ローザ・ルクセンブルクが言うように「官僚機構だけが活動的要素として残ることになる」[28]。だが，プロレタリアートが持つべき階級意識は，ルカーチの考えでは労働者大衆の日常意識からは導出出来ない。労働者の日常意識はあくまで資本主義的社会秩序の内部に留まるからである。ルカーチの立論では，階級意識は労働者大衆の日常意識を超えた外部から持ち込むよりほかなく，こうした「外部注入論」は明らかにセクト主義との親和性を持っていた。官僚主義的少数者支配は，「闘う労働者階級」を「一委員会の従順な道具」[29]にしてしまうというローザ・ルクセンブルクのレーニン批判は，ルカーチにも同様に当てはまる。

それゆえ，ルカーチがあくまで「官僚主義的セクト主義」を批判しようとするならば，その理路から言って，批判の射程は自身とクンを超えて前衛党による絶対的指導というボルシェヴィズムの根幹にまで及ばざるをえない。独裁体制が必然的に孕む官僚主義的支配の問題にルカーチが真正面から取り組み，セクト主義の克服を目指すようになったのは，1922 年春，彼がクンとの党内抗争に敗れた後のことである。クンとの闘争を通じてルカーチが目の当たりにしたコミンテルンは独善的な官僚主義そのものであった。政治的敗北がもたらした「不本意ながら出来た余暇（GK, 163）」のなかで，ルカーチはボルシェヴィズムの組織がいかにあるべきかという問いにあらためて向き合い，『歴史と階級意識』を上梓した。われわれはそこに，現存の党に対する批判の意図をはっきり見て取ることが出来る。ルカーチは述べる。官僚主義的階層が存在するところでは，人々は「人格的な満足や自己実現を見出せない」ために，その意識は「冷徹で強欲な功名心に突き動かされた利己主義」へと変わってしまう。こうした傾向は「共産党においても広汎な影響を与えているに違いない（GK,

（28） Luxemburg, Zur russischen Revolution, in: dies., *Werke*, Bd. 4, Dietz Verlag, Berlin 1974, S. 362.

（29） Luxemburg, Organisationsfragen der russischen Sozialdemokratie, *a.a.O.*, S. 440.

513)」と。

6.「三月行動」論争

ルカーチによれば，自らの内部にある革命主義と現実主義，セクト主義と集中制という「正反対の傾向の同時存在が頂点に達した（GK, 17)」のは，1921 年 3 月，中部ドイツで生じた武装蜂起「三月行動」以降のことだったという。

「三月行動」は，結果的に言うと一過性の騒乱に終わったのであるが，ルカーチら世界革命論者たちは，そこに世界革命を現実のものとする待望のドイツ革命の勃発を見ようとしていた。実際，ドイツ革命への期待は，「三月行動」に先立つ 1920 年 12 月，ドイツ共産党と独立社会民主党左派の合同により，党員 50 万人を擁する統一ドイツ共産党が結成されたことですでにかなり大きなものとなっていた。ドイツ共産党／スパルタクス・ブントに決定的に欠けていた大衆からの支持が，これによってようやく獲得されたと考えられたのである。統一大会の記録もまるで革命前夜を迎えたかのような当時の興奮を伝えている。「小規模であったために広範な労働者大衆に影響力を持たなかった共産党は，革命の理念ために戦った。今や強大となり広汎な大衆に依拠する党は，革命そのもののために戦うだろう。党はこれ以外のことをするわけにはいかない。なぜなら，革命の勝利の時は近づいているからだ」[30]。

しかしながら，客観的に見ればドイツの現状はけっして革命的ではなかった。ドイツ共産党／スパルタクス・ブントが慢性的に大衆の支持を得られなかったのは，端的に言って改良主義的労働運動の伝統を持つドイツにおいて，労働者大衆は帝政の廃止と民主的改革を望んでいただけで，ロシア革命の再演など求めていなかったからである。体制変革によってドイツ革命が終わっていたことが分からない共産党は，エーベルトがようやく回復した秩序を再び混乱に陥れようとする連中と目され，大衆から浮いた存在にならざるをえなかった[31]。

事実，統一ドイツ共産党の結成によっても大衆が共産党支持へと傾くことはなく，1921 年 2 月のプロイセン州議会の選挙でも，社会民主党 417 万 1000 票，独立社会民主党 108 万 7000 票に対して，共産党が獲得した票数はその 5 分の 1 の 115 万 6000 票あまりであった[32]。統一共産党議長パウル・レヴィが現状における直接行動を「一揆主義」として退け，合法的に労働者の多数派を味方につけることを当面の課題としたのは，むしろ理に適っていたと言えよう。

---

(30) *Bericht über die Verhandlungen des Vereinigungsparteitages des U.S.P.D. (Linke) und der KPD (Spartakusbund) vom 4. bis 7. Dezember 1920 in Berlin*, Frankes Verlag, Berlin 1921, S. 233.

(31) Cf. T. Werner Angress, *Stillborn Revolution. The Communist Bid for Power in Germany, 1921–1923*, Princeton University Press, New Jersey 1963, p. 17.

(32) Vgl. Levi, *Unser Weg wider den Putschismus*, A. Seehof, Berlin 1921, S. 23.

だが，党内では直接行動を求める性急な意見が強く，レヴィの姿勢は日和見主義的として批判され，結局彼は議長職を辞することになる。代わって登場したブランドラー／シュテッカー新議長の下，党は左派急進派が主導権を握りそこにクンをはじめとするコミンテルンメンバーが党指導部を指揮するためにベルリンへと到着して，事態は「三月行動」へとなだれ込んでいったのだった。

クンがドイツで行おうとしたことは極めて単純であった。クンによれば「ドイツは客観的には完全にプロレタリア独裁の準備が出来ているが，主観的には独裁の条件が存在していない」のだという。彼の言う主観的条件とは，「プロレタリアートの大部分」が「まだプロレタリア独裁の自覚的な戦士」[33]になっていないことを指す。そしてクンは，労働者大衆を自覚的な戦士として覚醒させるには，共産党が急進的な行動へと打って出るしかないと主張する。「ただ行動だけが，しかももっとも根本的な行動だけが，組織的な弱さを除去する可能性を与えてくれる」[34]。

上記のクンの発言は，ルカーチが編集者兼寄稿家として主たる論文の発表の場としていた『コムニスムス』に掲載されたものである。当時，『コムニスムス』は攻勢戦術の牙城になっていた。バウムガルテンによれば，「そのコンセプトは，もっぱら抽象的・哲学的で，経験をラディカルに否定した観念的カテゴリー体系を基礎にしており，労働者の欲求や現実的な利害には基づかないものであった」[35]。

クンは，この急進主義的政策を実行に移すべくドイツにおいて扇動活動を行い，彼に影響された新議長ブランドラーは，3 月 17 日党中央委員会議においてこう宣言するに至る。「われわれの影響力は，40 万から 50 万の党員を擁する我が組織を超えている。私は主張したい。今日われわれはすでに，わが共産主義組織によって影響力を与えることが出来，われわれの行動，いやわれわれの攻撃行動においても，われわれの旗の下に戦うだろう 200 万から 300 万の非共産主義者の労働者を全国に持っていると」[36]。

もっとも，「三月行動」は必ずしも党による計画的な蜂起として始まったのではなく，3 月 19 日，プロイセン州保安警察隊が労働者の武装を解除するという名目でマンスフェルト鉱山地帯へ進駐し，これをきっかけとして偶発的に鉱山労働者との衝突が勃発して武装蜂起へ発展していったというのが実態であった。事態を掌握しきれていなかった党は，後追い的に『赤旗』を通じて全ドイツ労働者にゼネストと武装蜂起の呼びかけを行ったものの，ゼネストは不発に終わり，武装蜂起も党が期待したほど大規模なものへ発展することはなかった。蜂起に加わった労働者の数も党の楽観的な見通しを裏切るもので，ドイツ共産党によれば，20 万人から 22 万人であった[37]。ブランドラーが断言し

(33) Béla Kun, Die Ereignisse in Deutschland, in *Kommunismus*, I. Jg., Heft 15, 24 April, 1929, Wien, S. 440.

(34) *Ebenda*, S. 441.

(35) Sigrid Koch-Baumgarten, *Aufstand der Avantgarde. Die Märzaktion der KPD 1921*, Campus Verlag, Frankfurt 1986, S. 79.

(36) Levi, *Unser Weg wider den Putschismus*, A. Seehof, Berlin 1921, S. 30.

た 200 万人から 300 万人の共産党の旗の下に戦うはずの労働者たちは実際にはどこにも存在せず，「三月行動」は早くも 4 月 2 日には鎮圧される。

だが，「三月行動」敗北後も，党執行部は「三月行動」を誤りだとは考えていなかった。統一ドイツ共産党執行部編集『革命的攻勢の戦術と組織　三月行動の教訓』によれば，「三月行動」はけっして無意味な一揆ではなく「党身体の病巣に対する劇的な治療法」だったのであり，これにより「労働者階級をその眠りから目覚めさせ，再び決断の前に置いたのだ」[38]という。

しかし，党執行部のこうした総括によっては「三月行動」に関する党への不満は沈静化せず，前議長レヴィが『われわれの道』と題する「三月行動」批判のパンフレットを出版するに及んで，「三月行動」問題はコミンテルン全体を巻き込む大論争へと発展し，その決着は同年 6 月から 7 月にかけて開催されたコミンテルン第 3 回大会まで持ち越されることになる。ルカーチも攻勢戦術論の立場からいち早くこの論争に参加し，「大衆の自然発生性，党の能動性」を発表して，「三月行動」支持の立場を鮮明にした。その基本的考えはドイツ共産党左派及びクンとまったく同じである。ルカーチは言う。「三月行動」における党の指導はけっして十分ではなく誤りもあったとはいえ，「プロレタリアートのメンシェヴィキ的惰眠，革命的発展の暗礁」を克服するためには，やはり「統一ドイツ共産党の行動，攻勢（SA, 141f）」が必要であったと。ルカーチの記憶によれば，この論文はクンと並んで「三月行動」の今ひとりの陰の指導者であったラデックから賞賛を受け，その内容を完全に是認すると言われたという[39]。

だが，レヴィが批判したのは，まさに「攻勢を通じて労働者を覚醒させる」という攻勢戦術の観念性であり，それを実行に移した党の身勝手さであった。レヴィによれば，「三月行動」は，共産党に与する労働者が労働組合員の 15 分の 1，非組合員では 14 分の 1 でしかないなかで「ダイナマイトやこん棒で労働者を行動へと駆り立て」，彼らに対して無理やり戦わねばならない状況を作り出した無謀な一揆に過ぎなかった[40]。とりわけ非難されるべきは，「三月行動」が「共産党の政治的欲求にのみ対応しており，プロレタリア大衆の主観的欲求に対応していない[41]」ことだという。「三月行動」で満たされたのは，共産党左派の高慢な政治的冒険心だけであった。

しかし，ドイツ共産党左派の党幹部たちは，彼らがレーニンから支持されるであろうことを疑っ

---

(37) *Protokoll desIII. Weltkongresses der Kommunistischen Internationale*, Verlag der Kommunistischen Internationale, Hamburg 1921, S. 250f. なお，三月行動に関しては，以下の研究が詳しい。篠塚敏夫『ヴァイマル共和国初期のドイツ共産党——中部ドイツでの 1921 年「3 月行動」の研究』，多賀出版，2008 年。

(38) *Taktik und Organisation der revolutionären Offensive: die Lehren der März-Aktion*, Frankes Verlag, Leipzig 1921, S. 3.

(39) Interview: Lukács on his life and work, *New Left Review*, London, no. 68, July-August, 1971, p. 55.

(40) Levi, *Unser Weg wider den Putschismus*, A. Seehof, Berlin 1921, S. 49.

(41) *Ebenda*, S. 38.

てはいなかった。「三月行動」の陰にはコミンテルンから派遣された指導者たちが存在していた以上,「三月行動」が否定されることはありえないと思われたのである。ところが「三月行動」敗北からコミンテルン大会が開かれる数ヶ月の間に，潮の流れは完全に逆転していた。「三月行動」の敗北を受けて，当面ヨーロッパ革命の見込みがないことを悟ったレーニンは，まるで自己の関与などなかったかのように「三月行動」を批判し[42],「攻勢戦術」を有害なものとして退け，労働者諸政党，労働組合との連帯を目指したレヴィの「『公開書簡』戦術」を「模範的なもの」とまで言い切っている[43]。ドイツに対して革命の扇動者を派遣する一方,「イギリス＝ソヴィエト通商協定」の調印によって西側諸国との通商を再開していたレーニンは，さしあたり西側諸国との「共存」によるソヴィエト・ロシアの存続を優先させ，合法的な勢力拡大を目指す統一戦線戦術を新たなコミンテルンの方針としたのである。だが，世界革命を待望しその実現を確信していたルカーチには，コミンテルン第3回大会におけるレーニンの「三月行動」批判後も，攻勢戦術を捨てることが出来なかった。

7. ルカーチの攻勢戦術

ルカーチの攻勢戦術の基盤は，つきつめれば彼が「社会主義的な戦術の決定的な基準（TE, 46)」であるという歴史哲学に求めることが出来る。ルカーチによると，歴史とは「精神が完全な無意識状態から明確に自己を意識するところまで自らを統一的に展開していく（TE, 58)」ひとつの道程である。精神の自己発見という論理に突き動かされる発展の思想，これこそマルクスによって忠実に受け継がれた「ヘーゲル哲学最大の遺産（TE, 58)」にほかならない，ルカーチはそう主張する。ただ，ヘーゲルとは異なり，マルクスは「社会の統一的な発展過程のなかに，自己自身を探し求め最終的に自己を発見する意識（TE, 59)」を思惟の内にではなく現実の内に見出すことに成功した。それがプロレタリアートの階級意識だというのである。したがって，ルカーチの理解するマルクスの唯物論的弁証法とは，端的に言えば自立しているかに見え，疎遠なものと感じられるようになった客体世界を，意識が我が物として取り戻そうとする遍歴を認識のなかで回顧的に完成させるのではなく，プロレタリアートの階級意識を置くことで具体的に実現するというものであった。

こうした形で「マルクスとヘーゲルをひとつの『歴史哲学』の下に統合（MM, 10)」し，その弁証法的論理展開の不可避性を信じるルカーチにとって，革命は先験的に必然のものであった。世界の意識化された形姿である主体と，主体の創造物である客体世界との間で推し進められる弁証法的なせめぎ合いの過程として理解される歴史において，世界を自己として取り戻そうとする主体によ

---

(42) Cf. Lazitch and Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, Hoover Institution Press, Stanford, Calif. 1972, pp. 487, 526.

(43) *Protokoll desIII. Kongress der Kommunistischen Internationale*, Verlag der Kommunistischen Internationale, Hamburg 1921, S. 511.

る疎外克服の運動すなわち共産主義は，この歴史哲学に準拠するかぎり歴史の外から持ち込まれる恣意的な目標ではなく，弁証法的ダイナミズムが惹起する歴史の内在的な一過程となる。ルカーチによれば，共産主義の歴史内在化こそ，マルクスをして空想的社会主義者たちを超えさせた不滅の業績なのであった。

上記のようなルカーチの革命的歴史哲学は，マルクスのヘーゲルへ向けての再転倒であるとして批判されてきた。しかし，それは必ずしもマルクスに対する曲解ではない。少なくとも，ルカーチが典拠とした初期マルクスの哲学的著作（『ヘーゲル法哲学批判序説』，『神聖家族』，『哲学の貧困』）において，マルクスはヘーゲル哲学を「自己意識の哲学」に過ぎないとして批判しつつも，ヘーゲルが「思弁的な叙述の内部では現実的な事象そのものを把握する叙述」[(44)]を与えていることを認めている。当時未刊であった『経済学・哲学草稿』において，マルクスは「否定の否定」を「すべての存在の唯一の真なる行為にして自己確証の行為として」捉えたとき，ヘーゲルは「抽象的で論理的で思弁的」な形ではあったが，「歴史の運動を表すための表現」を獲得したと述べている[(45)]。ルカーチが重要視したのは，マルクスがこの「否定の否定」を具体的現実に適応した『神聖家族』の次のような叙述であった。すなわち，プロレタリアートが資本主義社会のなかで「労働力商品」という「物件」として扱われ，「物件」としてしか生存出来ないという客観的環境と，それでも人間であるかぎり自身はあくまで「人格」であるという主観的意識との間に放置し続けることの出来ない矛盾・相克が生じている以上，プロレタリアートが「物件化」を可能ならしめている社会環境（否定）の全面的改変（否定の否定）に向かうのは，弁証法的に不可避であると[(46)]。

われわれがここに見出すのは，ベルンシュタインが批判したところのマルクス主義に内包されたヘーゲル哲学の観念性，負の遺産であろう[(47)]。だが，もともとヘーゲル主義者であったルカーチは，初期マルクスのヘーゲル主義にすんなりと結びつき，そこに孕まれていた観念性もそっくり受け継ぐことになる。

革命が歴史哲学的に必然とされるのであれば，残された問題は潜在的に存在する弁証法的可能性を顕在化させること，つまり労働者大衆に実は自分たちが歴史の主体たりうるプロレタリアートであることを自覚させることに尽きる。そのためルカーチは，「この歴史哲学的過程が意識され現実へ

---

(44) Engels, Marx, Die heilige Familie oder Kritik der kritischen Kritik. Gegen Bruno Bauer und Konsorten, in: Marx, Engels, *Werke*, Bd. 2, Dietz Verlag, Berlin 1957, S. 63.

(45) Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskript (Erste Wiedergabe), in: *MEGA*^{2} I–2, Dietz Verlag, Berlin, S. 277.

(46) Vgl. Marx, Die heilige Familie oder Kritik der kritischen Kritik, *a.a.O.*, S. 37.

(47) Vgl. Eduard Bernstein, *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie*, Dietz Verlag, Berlin 1991, S. 36. なお，ベルンシュタインのヘーゲル理解は不十分なものであり，ここで言われているヘーゲル主義とは，初期マルクスが理解していた観念的なヘーゲル主義である。

と覚醒されるすべての手段は良しとされねばならず，反対にこの意識をぼやけさせてしまうようなすべての手段は，当然悪い（TE, 48）」と主張したのだった。

ただし，ルカーチによれば労働者大衆のプロレタリアートへの覚醒は，日常生活が継続するかぎり生じることはない。しかし，資本主義的現実には周期的に経済危機が訪れ，そのたびにもっとも大きなダメージに晒されるのは労働者大衆であるという。労働環境の悪化，生活苦，失業，将来設計の崩壊などの形で，彼らにとって揺るぎないと思われた現実に亀裂が走る。経済危機が激化すれば，大衆行動へと挑発されることさえ稀ではない。ルカーチは覚醒への好機をここに見出す。

だが，この好機も自然発生的大衆行動に委ねているだけでは失われてしまう。ルカーチの見るところ，大衆行動は，結局資本主義的現実という枠組みのなかでの異常事態に過ぎず，同じ枠組みのなかでの異常事態であるがゆえに，そこには正常化への力学が働き，大衆行動は「自然発生的に勃発し，［……］その直接の目標が達成されたと思われたり，見込みがないと思われたりすると自然発生的に終息してしまう（OF, 140）」。だからこそ，大衆行動の勃発という好機を摑んで党が攻勢をしかけなければならない，ルカーチはそう主張するのである。むろん，ルカーチの主眼は指導組織がなければ大衆行動など自然に終息してしまうというありふれた事実に置かれていたのではなかった。攻勢戦術が目指しているのは，党の意識的な指導によって「プロレタリアートの階級意識に決定的な影響を与え，この働きかけを通じて国家権力の奪取を成就する（OF, 141）」ことなのである。

したがって，党が打破しなければならない本当の対象は，ブルジョワ権力よりもむしろ労働者大衆の現在の意識なのだという。ルカーチは述べている。「革命とその勝利を妨げてきた，もっとも本質でありながら，しかし理論的にも戦術的にもほとんど考慮に入れられて来なかった障害は，ブルジョワジーの強さにではなくむしろイデオロギー的障害としてプロレタリアート自身のなかにある（SA, 139）」。それゆえ，革命的戦術は労働者大衆の現実認識に揺さぶりをかけ，彼らの意識変革を引き起こすことをもってその要諦とする。「気力を喪失して深い眠りについているプロレタリア大衆を覚醒させ，彼らのメンシェヴィキ的指導者たちから（たんに精神的な意味ではなく組織的に）彼らをもぎ離し」，プロレタリアートを現実へと係留している「イデオロギー的危機の結び目を行動という剣で断ち切ること（SA, 142）」，これこそまさに攻勢戦術の本質なのであった。ルカーチは言う。「三月行動」のように攻勢が失敗に終わったとしても，党が自らの目的を明確に認識し「『敗北』がプロレタリアートのイデオロギー的危機の解消を促進する（VK, 81）」かぎり，レヴィが批判するように，けっして一揆主義，ブランキズムにはならないと。

ルカーチはこうした立論に絶対の自信を持っていた。コミンテルン第 3 回大会における「三月行動」否定の議論に対してルカーチはこう嘆息している。「重要な一歩を前に向かって踏み出した偉大な革命的大衆運動が，まるで一揆であったかのように軽視されてしまっている（DS, 46）」と。だが，コミンテルン第 3 回大会後の政治状況は，ルカーチに攻勢戦術論者であり続けることを許すようなものではなかった。大会後まもなく，ルカーチが主な言論活動の場としてきた『コムニスムス』

はトロツキーによってその攻勢戦術的姿勢を批判され[48]，それが直接の原因ではなかった可能性もあるものの，コミンテルンの命によって唐突に廃刊となる。また同年 12 月，コミンテルンは内部にくすぶる攻勢戦術派を一掃して統一戦線戦術を徹底させるために，「労働者統一戦線についての命令」を各国共産党に布告した。これによって，ルカーチは深刻な理論的苦境に陥っていく。

8. 現実への志向

この時，ルカーチが事態をどう捉えていたのか，その消息を伝える資料は残っていない。後の回想録，インタヴューにおいても，コミンテルンの方針転換について触れた箇所は存在しない。ルカーチは「三月行動」あるいは攻勢戦術に関して，とりたてて総括することなしに，たんに語らなくなっていくのである。1921 年夏の第 3 回大会以降，ルカーチは 1922 年 1 月に「ローザ・ルクセンブルクの『ロシア革命批判』に関する批判的考察」を発表しただけで，1923 年の『歴史と階級意識』出版まで政治的にはほとんど沈黙を保っていた。攻勢戦術論を封じられたルカーチには，自らの革命論を根本的に再構築する時間が必要だったに違いない。

しかし，ルカーチの述懐を額面通りに受け取るならば，彼に理論転換を促したのはコミンテルンの政治的圧力ではなく自ら自身の矛盾である。ただし，この矛盾を表面化させるきっかけを提供したのは，やはりコミンテルン第 3 回大会であった。

第 3 回大会は，ルカーチにとって二つの意味を持っていた。ひとつは「三月行動」論争の総括である。コミンテルンにおける代表的な攻勢戦術の理論家であったルカーチにとって，当然ながらこれは大きな関心事であった。だが，これと並んでルカーチには第 3 回大会に関心を寄せる今ひとつの理由があった。すなわち，ルカーチらランドラー派はハンガリー共産党の内部分裂問題をコミンテルンに持ち込み，第 3 回大会においてその決着をつけようとしていたのである。

この時コミンテルンが下した裁定は，党の分裂を収束させるための折衷案的なものだったと言える。すなわち，ランドラー派に配慮しつつもクン派が多数派になるよう党中央委員を指名し，党内政治に関してはクンの主導権を認める。しかし，政策面では「三月行動」に代表される急進的戦術を否定する第 3 回大会の方針にしたがってクンを退け，労働組合・社会民主党内部での共産主義勢力拡大を目指すランドラー派を支持する，そうしたものだった。権力争いという点では敗れたとはいえ，クンに対するルカーチらの「冒険主義」批判は正当と認められたのである。だが，第 3 回大会におけるこの部分的勝利はルカーチにとって捻れを含んだものにならざるをえなかった。クンの急進的政策を糾弾するルカーチは，同時に第 3 回大会におけるもっとも頑強な「三月行動」支持者だったからである。

---

(48) Vgl. Leon Trotsky, *Die Neue Etappe: die Weltlage und unsere Aufgaben*, Verlag der Kommunistische Internationale, Hamburg 1921, S. 407.

こうしたなかでルカーチは,「三月行動（1921 年）vs ハンガリーの政治（GD, 263)」という形で,自らに問いを立てたのだという。これにより，ハンガリー政治の現実に準拠して「三月行動」を捉えなおしたルカーチは，攻勢戦術が現実から乖離していたことを認めざるをえなくなっていった。ルカーチには，コミンテルンの方針転換にしたがうという政治的都合のみならず，攻勢戦術を乗り越える内在的理論形成の必要性が発生してきたのである。『歴史と階級意識』は，ルカーチの陥っていたこの理論的苦境に対するひとつの応答であった。ルカーチは述べている。「『歴史と階級意識』は,このような内面的な危機的過渡期において成立したのだ（GK, 18)」と。

しかしながら,『歴史と階級意識』でルカーチが攻勢戦術に直接言及し，その問題性を明確にした箇所は存在しない。そのため,『歴史と階級意識』においてもなおルカーチは攻勢戦術論者であったと評価する論者もいる。[49] だが,『歴史と階級意識』におけるルカーチの認識は明らかに攻勢戦術とは一線を画するものだった。

攻勢戦術論者としてのルカーチは，その革命的歴史哲学に基づいて以下のような見通しを持っていた。労働者大衆は潜在的には社会の主体であり，社会を自己として取り戻すことの出来る立場にいる。しかし，ブルジョワ社会にイデオロギー的に囚われているために，こうした階級意識を獲得するには至っていない。それゆえ，彼らをそのイデオロギー的拘束から解き放ち，労働者大衆の意識が自己意識化されるなら，彼らはその正しい階級意識に到達するであろう。ルカーチによれば,それは一見極めて困難な課題に見えるけれども,「客観的には経済危機が存在するために，プロレタリアートがブルジョワ的（ないしは小ブルジョワ革命的）先入観にイデオロギー的に拘束されている状態を突き破るに，ただあと一押しという一連の瞬間が作り出される（VK, 80)」という。この時,すかさず共産党の主導によって労働者大衆を直接行動へと導き，彼らのメンシェヴィキ的惰眠を打破するならば自ずと革命への道は拓けてくるに違いない，ルカーチはそう考えていたのである。

したがって，攻勢戦術は基本的にハンガリー革命の理論の継続であった。ハンガリー革命におけるプロレタリア独裁は，当時の国内外の政治情勢により，さしたる軋轢を生み出すこともなくいわば自然な形で樹立されたものだった。ルカーチはこの時「プロレタリアートは自己の可能性を自覚し，その明晰な自己意識をもって自らの統一，力，形姿を作り出した（TE, 82)」と主張していた。ルカーチによると，指導者たちがやったことは，プロレタリアートの意識に「理論的形式」を与えたに過ぎない。プロレタリアートの行動は,「理論と実践の直接的統一」を表現するものなのである（TE, 82)。しかし，革命の敗北後，ルカーチはプロレタリアートは自然な形ではこの自己意識に到達しないと考えるようになる。むしろ党が能動的な役割を果たすことで労働者大衆に自覚を促そうとしたのであった。しかしハンガリー革命時であれ攻勢戦術においてであれ，いずれにしてもその

（49） Rudolf Schlesinger, Historical Setting of Lukács's History and Class Consciousness, in: *Aspects of History and Class Consciousness*, ed. by I. Mészaros, Routledge & K. Paul, London 1971, p. 193.

前提は，労働者大衆は潜在的には革命的プロレタリアであるということにほかならない。

これに対して，『歴史と階級意識』のルカーチは，こうした都合よく理想化された労働者大衆ではなく，現実の労働者大衆を見据えようとする。その時見出されるのは，労働者大衆が少しもプロレタリア的ではなく，むしろその意識・思考の点で徹底的にブルジョワ的な存在であるということだった。ルカーチによれば，労働者大衆はどれほど厳しい経済危機の最中にあっても，「依然として精神的にブルジョワジーの影響の下に留まり（GK, 481）」，彼らのイデオロギー的危機が解消されることはない。経済危機による労働者大衆の生存条件の悪化は時として大衆行動を引き起こすことはあっても，労働者大衆の意識，思考を揺るがすことはなく，彼らは資本主義的現実を別様に見ることが不可能な唯一の現実と看做し続ける。したがってルカーチは，「無意識的なものを意識的なものに，潜在的なものを現在的なものに（GK, 480）」転換することが問題であるという想定は，「プロレタリアート自身の恐るべき内面的なイデオロギー的危機（GK, 480）」を理解していない空想論だと主張する。攻勢戦術は，この誤った前提の下に構想された戦術であった。

労働者大衆の意識に関するこうした評価の転換は，ルカーチにとってけっして恣意的なものではない。『歴史と階級意識』のために書かれた新たな論考「物化とプロレタリアートの意識」は，労働者大衆が本質的にブルジョワ的であり，そのイデオロギー的危機は容易に解消されないほど強固なものになっていることを，構造的に解明しようとする理論的営為だったからである。ルカーチによれば，資本主義的生産様式の発展とは人間を含むあらゆる対象を合理的計算の要素へと還元していく過程にほかならない。これによって客体世界は，疑似自然法則的な計算合理性の規定する抽象化された要素と要素との関係世界へと変容する。価値や規範を介して形成されていた人間と人間との社会関係は，即物的な要素と要素の関係に変わり，市場原理のような人間の意志に左右されない合法則性を梃に，人間に対して疎遠な世界として自立化していく。しかし，自らを労働力商品として「物化」し，それを世界に投入する以外に社会関係に入っていくことが出来ない大部分の人間は，否応なくこの即物的体系に心身ともに巻き込まれざるをえない。即物的体系の要素となった人間は，「疎遠な体系に組み込まれた孤立化した小部分としての自らの存在に生じた事態を，なんの影響力も持たないまま傍観する者（GK, 264f）」となる。ルカーチが着目するのは，その際に発生する主体の意識の変化であった。この疎外経験が持続的な日常となるなかで，人々の思考はやがて即物的体系と同調してしまい，ついには自らを「外的世界の様々な対象のように『所有』し『売却』する『物』（GK, 275）」であると認識しはじめる，ルカーチはそう主張するのである。彼はこのことを「物化された意識（GK, 268）」と呼んだ。それはまさに，これまでルカーチが抽象的な「精神の無意識状態」として捉えてきた労働者大衆のイデオロギー的危機，ブルジョワ社会に対するイデオロギー的な屈服を，現実に即して具体的に規定する作業だったのである。

こうして「人間のもっとも深い肉体的および精神的な領域（GK, 276）」にまで「物化」が及んでいると考えるようになったルカーチが，労働者大衆の意識を一挙に覚醒しようとする攻勢戦術につ

いて語らなくなったのは当然であろう。労働者大衆の「物化された意識」は，理論的労苦を払ってひとつひとつ解きほぐしていくしかない。イデオロギー的危機が「物化」の引き起こす必然的な現象であることを確認したルカーチは，『歴史と階級意識』において，「物化された意識」の生成過程を辿ることでイデオロギー的危機を解消しようとするのである。

そして，「物化された意識」の生成過程を辿る時，明らかになるのは揺るぎないと思われた資本主義的現実が仮象の現実であるということであった。ルカーチによれば，「物化」とは「存在」からそのすべての具体性を剝ぎ取りたんなる「物」へと変換していくことである。この抽象的な「物」と「物」との関係で形成されるのが，「物化された世界」つまり資本主義的現実にほかならない。したがって，ルカーチは資本主義社会を具体的現実の抽象化の上に構築された仮象の現実と捉える。ウェーバーの言う近代人が閉じ込められた「鋼鉄の檻」を，ルカーチはその仮象性を暴露することを通じて破壊しようとしたのである。『歴史と階級意識』のルカーチにとって，イデオロギー的危機は暴力的に破壊すべき対象ではなく，社会意識論的に解消されるべきものであった。

9. 官僚主義的セクト主義と新たな党理論

「物化とプロレタリアートの意識」は，社会現象の物象性のみせかけを暴露し，プロレタリアートが「適切な社会的意識を持つことが（客観的に）可能な歴史過程における最初の主体（GK, 387）」であることを明らかにしようとする「実践に関する理論（GK, 394）」であった。しかし，それは革命的意識の理論に過ぎず，これを「実践の理論（GK, 394）」へと変換するためには「理論と実践とを媒介する（GK, 475）」社会的な組織が必要となる。ルカーチによればそれが共産党であった。「行動を通じての労働者大衆の意識の覚醒」という構想を退けたルカーチは，労働者大衆の意識転換が行われる具体的な場として，党組織を考えたのである。『歴史と階級意識』のために書き下ろされた今ひとつの論考「組織問題の方法的考察」で論じられるのがこの問題であった。

その際，ルカーチは自らもまた抱えていた党における官僚主義的セクト主義を乗り越えて行く必要があった。資本主義社会に生まれ育った労働者大衆は，その思考，感性のレベルで「物化」されており，したがってイデオロギー的危機はプロレタリアート自身の意識にあると見ていたルカーチは，「共産党の闘争」を「プロレタリアートの階級意識を巡って行われる（GK, 493）」ものだと主張する。そしてルカーチは，「党の内的な生活」を「こうした資本主義の遺産に対する絶えざる闘争（GK, 513）」と位置づけたのであった。しかし，資本主義社会のなかで全体的機構の歯車となることが習い性となった人々は，共産党の業務においても自ら精神を喪失した専門家，仕事の自動機械になってしまう。しかも，共産党といえども事実上の分業体制や職務上の階層秩序は持たざるをえない。階層秩序を持った分業体制が生まれてくれば，いくら官僚主義的ではないと言っても，そこに「残忍で，貪欲な，あるいはひたすら地位の向上を目指す利己主義（GK, 513）」が生まれてくるの

は避けがたい。ルカーチは，ウェーバーが指摘するように近代的組織において官僚支配が不可避であることもある程度認めていた。ルカーチははっきりと述べている。「硬直化，官僚主義，腐敗等々の危険性」は共産党においても存在し，ありふれた現象になっていると（Vgl. GK, 513）。

ところでウェーバーによれば，近代において「官僚制組織が普及した決定的な理由は，もともと他のあらゆる形態を純粋に技術的な意味で凌駕していた[50]」ことに依拠していた。そしてその卓越性を支えるのは，官僚制の持つ「没主観的」組織編制，すなわち「『個人の人格を問題とせずに』計算可能な規則にしたがって事務処理をする[51]」ことにある。ウェーバーによれば「作業分割の原則を貫徹する最適度の可能性を提供[52]」するのはこれであった。したがって官僚組織はルカーチが批判するように「全人格を把握しようとは努めない」のではなく，むしろそうした把握を積極的に排除することでその強みを発揮するのだと言える。だが，ルカーチからすればこの「没主観的」観点こそ「物化」の基礎にある打破すべき対象だった。「人間の全人格を抽象化し，抽象的視点の下に人間を包摂することから手を切る（GK, 497）」こと，ルカーチにとって重要なのはこのことである。

それゆえルカーチは，失われた人格の統合を再生させるために，党員に対して「全人格的な党務への専心」という実体験を積むことを要請する。ルカーチには，「党員が各自の全人格を党活動に動員（GK, 513）」する時，はじめて党の内的生活が「人間意識の物化を突き破る（GK, 497）」ための歩みになると思われたのである。しかし，「全人格的な党務への専心」が意識転換の鍵とされるのであれば，人間を機構の一歯車へと変える党の官僚主義化は，革命のための深刻な障害とならざるをえない。「鉄の規律」の名の下に指導部への黙従を要請する党組織では，「物化」は乗り越えられないからである。ルカーチは述べている。組織問題は，革命の技術的な問題に留まらず「革命のもっとも重要な精神的問題（GK, 471）」なのだと。

だが，ルカーチが目の当たりにしていた共産党は，こうした理念を担うに足るような組織ではなかった。それはなにも，厳格な官僚的集中制を主張するクン主導のハンガリー共産党だけではない。当時，ルカーチは「コミンテルンの官僚主義的教条主義（GD, 263）」にもすっかり失望していたという。ルカーチによれば，この官僚主義的セクト主義はジィノヴィエフとクンによって，コミンテルン，ハンガリー共産党に持ち込まれたものであった（Vgl. GK, 15）。

こうした認識は，ルカーチがクンとの闘争において味わった苦い経験に基づいている。すでに述べたように，ルカーチらはコミンテルン第3回大会において党の主導権をクンから奪取しようとしていた。その際，クンに指導者としての資格がないことの証拠として，ルカーチらが突きつけたのが，彼の金銭スキャンダルであった。ルカーチによると，コミンテルンとのパイプを持つクンには，

（50） Max Weber, Typen der Herrschaft, in: *Grundriss der Sozialökonomik, III.Abteilung, Wirtschaft und Gesellschaft*, J. C.B. Mohr, Tübingen 1947, S. 660.

（51） *Ebenda*, S. 661.

（52） *Ebenda*, S. 661.

モスクワから多額の資金が流れ込み，クンはそれを横領して自らの権力の源泉にしていたというのである（Vgl. GD, 118ff.）。このことは，ハンガリー共産党内部ではすでに公然の秘密になっていた。[53] ところが，第3回大会においてコミンテルンはクンの金銭スキャンダルを議題に乗せず，引き続き彼を党指導者として指名したのである。しかし，これに納得出来なかったルカーチらは，大会後も粘り強く反クンキャンペーンを継続し，ついに正式な調査をすることをコミンテルンに約束させる。だが，1922年2月に発表された調査結果は，再びルカーチらを落胆させるものであった。コミンテルンは「同志ベーラ・クンに対するシンパシーと信頼を表明し，同志クンに対してなされた様々な誹謗中傷への嫌悪を表明する[54]」と述べ，ルカーチらの訴えを退けたのである。時期的に見ると，ルカーチが『歴史と階級意識』執筆に向かったのは，この後のことであった。

だからこそ，ルカーチは『歴史と階級意識』において，どうしても党の問題を語る必要があったのだと言えよう。労働者大衆のイデオロギー的危機が打破されるのは党においてであると考えるルカーチにとって，党指導者であれコミンテルンであれ，党は一部の人間の意のままになってはならず，党員がその操作対象になってはならなかった。ルカーチによれば，資本主義社会を乗り越えるための橋頭堡である共産党には，「ブルジョワ政党の構造から持ち越された指導者と大衆との険しく流動性を欠いた対立（GK, 515）」が存在してはいけないのである。

しかしながら，共産党に一種の啓蒙機能を期待するにしても，党は革命を実行するための実践的機関でなければならない。この点で，ルカーチもまた共産党が鉄の規律を持つ集中化された組織であることを認めている。それゆえ，集中制を保持しつつ，なおかつ官僚主義的ではない組織のあり方を発見すること，これがルカーチの課題となったのだった。

その基本的な着想は，集中制に精神的原理を吹き込み，党の意志に対する党員の服従を「自発的」なものとすることである。ルカーチによれば，「組織上の集中化」はけっして党員の指導部に対する「『盲目的服従』を意味するものではない（GK, 509）」。党の集中制とは，党員が「党の全体意志」に対して「意識的にしたがうこと（GK, 493）」の表現であるという。そして，全体意志に対するこの意識的服従を引き出すために，ルカーチは党に民主的原理を導入したのである。すでに言及したように，ドゥチンスカの証言によれば，ランドラー派がクン派に対して訴えていたのはほかならぬ党の民主化であった。

だが，共産主義を西欧近代の超克と捉えていたルカーチは，民主主義という言葉を避けこれを「組織の感受性」と表現した。ルカーチによれば，「方針の転換，闘争の強化，退却などに対する組織の感受性が極度に高まっている（GK, 509）」状態，これが「組織上の集中化」の本質であるという。

---

(53) Vgl. Ernst Bettelheim, *Zur Krise der Kommunistischen Partei Ungarns*, Selbstverlag, Wien 1922, S. 39.

(54) György Borsányi, *The Life of a Communist Revolutionary. Béla Kun*, trans. by. M. D. Fenyo, Columbia University Press, New York 1993, p. 277.

われわれはルカーチの言う感受性を，組織の再帰性と言い換えてもよい。ルカーチのあらたな党構想では，指導部と党員は本来同じ階級意識から生まれた一体のものであり，指導部はその知によって党員に対して超越的位置づけを持つのではなく，この全体のなかでのより意識的な部分でしかない。ルカーチによれば，「『自覚的』な少数者が『自覚していない』大衆のために行為」しなければならないとするセクト主義者は，党と大衆との「客観的に存在する弁証法的統一（GK, 499）」を理解していないのだという。そして，この弁証法的統一が集中制として現れ，指導部から党員への意志の流れを上意下達のものにするのであるが，一体性に基づく集中制であるがゆえに，党員による指導部への批判もまた可能となる。ルカーチは述べる。党員はその全人格をあげて党務に専念し，党と一体となっているがゆえに，「ただちに批判を行う状況にあるだけでなく，まさに行うよう強制されている（GK, 514）」。こうした指導部と党員との間で交わされる活発な相互作用が，組織の感受性を高め，「健全で行動能力を高める自己批判の可能性を最大限に促進するのは明白である（GK, 509）」と。

また，現実的には存在せざるをえない党の階層秩序を固定化させないために，ルカーチは，その時々，党の課題とする優先事項に応じて部門間の上下関係を速やかに変更し，党員がその地位に固執しないよう人員の入れ替えも柔軟に行われなければならないと主張する（Vgl. GK, 514）。「共産党の合目的的な行為の必然性が，硬直化，官僚主義，腐敗等々の危険性を必然的に含んでいるところの，広汎な事実上の分業をおしつける（GK, 513）」だけに，このことは一層必要となる。こうして，党員が指導部に対して自由に批判を行い，党の階層的固定化を防ぐことで，ルカーチは官僚主義的セクト主義を消滅させようとしたのであった。

当時のコミンテルンにおいて，ルカーチが提起した党構想は極めて大胆な意見だったと言ってよい。後の述懐によれば，『歴史と階級意識』においてルカーチは，「政治的態度における根底的な転換（GD, 267）」を行ったのだという。しかしその一方で，ルカーチの議論には党員による指導部への批判の自由を保障し，それを意思決定に反映させるための制度的構想が欠けているため，集中制と民主的要素との共存がどのようにして実現されるのかまったく明らかではない。確かに彼は，党員たちの倫理性に最初から期待することは馬鹿げており，腐敗や堕落を除去する「組織的な予防措置や保証が探求され，発見されねばならない（GK, 513）」とは主張している。しかし，もしそれらを具体的に最後まで考えていったなら，その答えはやはりルカーチが否定していた西欧的な民主主義的組織に行き着いたのではないだろうか。

10.　終わりに

これまで述べてきたように，『歴史と階級意識』は初期思想のたんなる総括的決算ではなく，「内的な危機的過渡期」のなかでクンを自らの鏡としつつ，ハンガリー革命期に形成された観念的革命

論から脱却していく過程だったと言える。このあらたな理論的地平を切り開く中心となったのが，『歴史と階級意識』のための書き下ろし論文「物化とプロレタリアートの意識」と「組織問題の方法的考察」であった。理論的考察のまとめとして「物化とプロレタリアートの意識」を第 4 章に挿入し，その現実化へ向けての実践的考察の結論として「組織問題の方法的考察」を最後に置いたのがルカーチの意図である。この意味で両論文は補完的な関係を持っていた。

だが，あらたに形成された革命論もまた多くの問題を抱えていた。すなわち，急進的な行動主義が誤った前提に基づくものだと考えたルカーチは，「物化とプロレタリアートの意識」において，労働者大衆のイデオロギー的危機が生成されていく過程を社会的意識論的に明らかにし，固定観念を流動化する「物化」論の視座を提示した。しかし，急進主義が理論的に破棄されるなら，急進的行動を指揮するセクト主義も同時に破棄されねばならない。強力な党の指導性を意味するセクト主義と急進的な革命主義はコインの裏表の関係であり，イデオロギー的危機の社会意識論的な解体とセクト主義的革命主義は理論的に結びつかない。共産党がセクト主義的に強力な指導性を発揮する攻勢戦術は，一種のショック療法であり労働者大衆が潜在的には革命的プロレタリアである限りにおいてのみ有効なのであった。だが，この前提を捨てて労働者大衆の現在の意識の社会的意識論による解消を目指す時，指示される方向性は啓蒙の道であり，党の強力な強制的な指導性は不必要であるだけでなくその障害にすらなる。というのも，「物化とプロレタリアートの意識」でルカーチが構想していたのは，労働者大衆が自らの存立構造を認識することでイデオロギー的危機を解消し，同時に自らが社会的存在であることを自覚することで，社会に対する意識的な主体へと変貌を遂げていくことだったからである。理論の道を通って実践へと接続される過程，これこそが理論と実践の真の統一にほかならない。それはけっして強制によって達成されうるものでないはずである。だが，その脱セクト主義的志向にもかかわらず，社会に対する劇的な変化をもたらす革命の夢を堅持していたルカーチは，性急に革命を引き起こそうとするレーニン的「前衛党」論を最後まで捨てることが出来なかった。ルカーチは『歴史と階級意識』執筆時のことをこう回想している。「1922 年，興奮した，革命への待望でいっぱいになった気分。[……] 私は全身全霊を傾けて，最初の大きな革命の波が過ぎ去ってしまったとか，共産主義的前衛の断固たる意志が資本主義を打倒出来ないとかいうことを断じて認めなかった。つまり，私の主観的な根底にあったのは革命的焦燥であり，そしてその客観的成果が『歴史と階級意識』であった（PR, 334）」。ルカーチは共産党が労働者大衆にとってのセクトにならぬよう腐心しているが，共産党は「ある一定の瞬間に客観的に存在している可能性を明確に際立たせる（GK, 504）」ことで，労働者大衆を指導するセクトだったのである。

したがって，『歴史と階級意識』における決定的に重要な研究とされた「物化とプロレタリアートの意識」と「組織問題の方法的考察」は，ルカーチのなかにあらたな対立を生み出すことになる。ルカーチによれば，『歴史と階級意識』は「一層大きな明確性へと移行していく段階の諸傾向（GK, 18）」を表す著作であった。この傾向は『歴史と階級意識』のなかに萌芽的に含まれてはいたが，現

実的に展開されるまでには至らなかったという（Vgl. GK, 18）。だが，ハンガリーの闘争において現実性を重視するようになったルカーチは，最終的に「ブルム・テーゼ」において「ブルジョワ民主主義の完全な実現」としての「民主主義独裁」を目標として掲げるようになる（BT, 710）。ルカーチの反セクト主義が完成されるのは，『歴史と階級意識』出版から 5 年後，ようやく「ブルム・テーゼ」においてであった。

（秀明大学学校教師学部教授）